

稱讃

二二七号

二〇二二年十一月一日発行

新型コロナウイルスの感染も漸く収まりつつありますが、これから寒くなっていきますので、予断を許さず、風邪などめされませんよう、ご自愛ください。

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃 寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

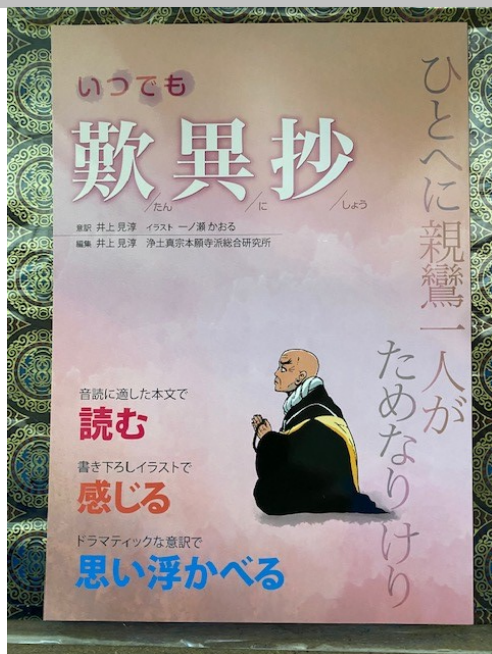
FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanjii.com

いそぎまゐりたきころろなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよいよだいひだいがん
大悲大願はたのもしく、往生はけつじよう ぞん ぞうら
決定と存じ候へ。踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へもまゐりたく候はんには、煩惱のなきやらんと、あやしく候ひなましと云々。
うんぬん ぞうら ほんのう じようど

（『歎異抄』第九条より）

『いつでも歎異抄』（意識・編集 井上見淳氏）の第九条の右の文の意識には、阿弥陀さまは、早く浄土に生まれたいなんて思うてもおらんこんなわしらを



特に心配しておられる。これだからこそ、阿弥陀さまの大きいなる慈悲の願いはますますたのもししいし、わしらも浄土に生まれることはいよいよ間違いないということよ。逆に、わしらもいたいな者に、踊り上がるような喜びが起きて、早く浄土に生まれたいと思う心があるようなら、（はて、煩惱がなくなつてしまつたかの？）と、かえつて不安になつたりしてな。ほほほ。困つたもんよの、唯円さんや。

とありました。これまで、私は、ご信心を得ても心から喜べないのも、急いでお浄土へ往きたいと思えないのも、煩惱の所為であり、それが当然だから心配ない。それよりも、親鸞聖人は、ご信心を得たかのように振る舞い、お浄土に往けるものと思い、煩惱が消えて、正しく浄土往生を願い求めていると思ひ込んでおられる方を心配し、批判し、戒めているのだと解釈していました。そして、そういう人に比べれば、喜べない自分を正当化していたようです。

しかし、井上氏の意識を読んで、親鸞聖人は、他人事ではなく、我が身にひきかけて申しておられたのだなあと知らされました。ときに、自分の方が阿弥陀さまのお心を心得ているとか脳裏をかすめたら、これは、煩惱が薄らいだのではなく、いよいよ、煩惱が現れていることと心得ることなのだろうと思います。それに加えて、自分が正しいと思つたら、煩惱のだと、一旦止まるよう気を付けたいと思います。

「親教

「浄土真宗のみ教え」をいただく

「浄土真宗のみ教え」についての親教

本年も、皆さまと共に立教開宗記念法要のご勝縁に遇わせていただきました。立教開宗とは親鸞聖人が『教行信証』を著して他力の念仏を体系的にお示しになり、浄土真宗のみ教えを確立されたことをいいます。この法要をご縁として、私たちに浄土真宗のみ教えが伝わっていることをあらためて味わわせていただきますしう。

さて、仏教を説かれたお釈迦さまは、諸行無常や諸法無我という言葉でこの世界のありのままの真実を明らかにされました。この真実を身をもって受け入れることのできない私たちは、日々「苦しみ」を感じて生きていますが、その代表的なものが「生老病死」の「四苦」であるとお釈迦さまは表されました。むさぼり・いかり・おろかさなどの煩惱を抱えた私たちは、いのち終わるその瞬間まで、苦しみから逃れることはできません。

このように真実をありのままに受け入れられない私たちのことを、親鸞聖人は「煩惱具足の凡夫」と言われました。そして、阿弥陀如来は煩惱の闇に沈む私たちをそのままに救い取りたいと願われ、その慈悲のお心を「南無阿弥陀仏」のお念仏に込めてはたき続けてくださっています。ご和讃に「罪業もとよりかたちなし妄想顛倒のなせるなり」「煩惱・菩提体無二」

とありますように、人間の分別がはたらき出す前のありのままの真実に基づく如来のお慈悲です。すから、いのちあるものすべてに平等にそがれ、誰一人として見捨てられることなく、そのままの姿で摂め取ってください。

親鸞聖人は「念仏成仏これ真宗」（『浄土和讃』）、「信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり 自然はすなはち報土なり 証大涅槃うたがはず」（『高僧和讃』）とお示しになっています。浄土真宗とは、「われにまかせよ そのまま救う」という「南無阿弥陀仏」に込められた阿弥陀如来のご本願のお心を疑いなく受け入れる信心ただ一つで、「自然の浄土」（『高僧和讃』）でかたちを超えたこの上ないさとりを開いて仏に成るといふみ教えです。

阿弥陀如来に願われないのちと知らされ、その温かな慈悲に触れる時、大きな安心とともに生きていく力が与えられ、人と喜びや悲しみを分かち合い、お互いに敬い支え合う世界が開かれてきます。如来のお慈悲に救われていく安心と喜びのうえから、仏恩報謝の道を歩まれたのが親鸞聖人でした。私たちも聖人の生き方に学び、次の世代の方々にご法義がわかりやすく伝わるよう、ここにその肝要を「浄土真宗のみ教え」として味わいたいと思います。

浄土真宗のみ教え

南無阿弥陀仏

「われにまかせよ そのまま救う」の
弥陀のよび声

私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ

「そのまま救う」が 弥陀のよび声
ありがとう といたいて
この愚身をまかす このままで
救い取られる 自然の浄土
仏恩報謝の お念仏

み教えを依りどころに生きる者 となり
少しづつ 執われの心を 離れます
生かされていることに 感謝して
むさぼり いかりに 流されず
穏やかな顔と 優しい言葉
喜びも 悲しみも 分かち合い
日々に 精一杯 つとめます

来る二〇二三（令和五）年には親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要をお迎えたします。聖人が御誕生され、浄土真宗のみ教えを私たちに説き示してくださったことに感謝して、この「浄土真宗のみ教え」を共に唱和し、共につとめ、み教えが広く伝わるようお念仏申す人生を歩ませてくださいませう。なお、二〇一八（平成三〇）年の秋の法要（全国門徒総追悼法要）の親教において述べました「私たちのちかい」は、中学生や高校生、大学生をはじめとして、これまで仏教や浄土真宗にあまり親しみのなかった方々にも、さまざまな機会でご縁に引き続き唱和していただき、み教えにつながっていくご縁にしていきたいと願っております。

二〇二二（令和四）年四月一五日

浄土真宗本願寺派門主 大谷 光淳

「親教をいただいて

本願寺派勸学寮頭 徳永一道師

させていただきたいと思う。

「親教には親鸞聖人の『高僧和讃』善導讃の一首の、

去る二〇二二（令和三）年四月一五日に本

山・御影堂で勤修された立教開宗記念法要において、ご門主が『浄土真宗のみ教え』についての親教』を述べられた。

その骨子は、浄土真宗の教えの根幹が南無阿弥陀仏の名号であり、この名号が「生老病死」という四苦のただ中にある私どもの人生の最終的な依りどころとなるということであった。

南無阿弥陀仏の名号は阿弥陀如来のご本願すなわち一切の衆生を救いたいという如来さまの願いのあらわれであり、それを信受することが同時に私どもの救われるすがたでもあるということにほかならない。

既述のように、この「親教」において、ご門主がわれわれに伝えようとした親鸞聖人の教えの根幹は、南無阿弥陀仏の六字の名号にあり、さらにそのはたらきは聖人が明らかにされた法義のエッセンスである「自然法爾」の四文字につくされるということである。

「ご無礼ながら、このことについて蛇足になることを承知の上で、私の理解するところを述べる

信は願より生ずれば

念仏成仏自然なり

自然はすなはち報土なり

証大涅槃うたがはず

（『註釈版聖典五九二頁』）

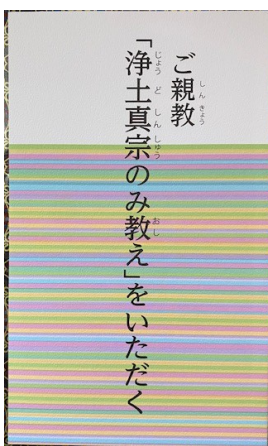
が引用されている。この「和讃」の骨子が「自然法爾」であることは言うまでもないが、ここでは如来のご本願のはたらきそのものを直接に指し示していると言ってもよいであろう。それは、私どもの勝手な思い込みや利己的な計算を超えて、往生浄土という究極のゴールへと向かわしめるはたらきでもあるといえよう。そしてまた、その究極の到達点であるお浄土がまた「自然法爾」の世界であるということになる。親鸞聖人は、この「自然法爾」を阿弥陀如来の救いのはたらきのサイクルとしてお示しくださったことを右記の和讃をもって私どもに伝えんとされたのであろう。

これはまた、「親教」において「浄土真宗のみ教え」としてお示しになったところであると言つてもよいと思われる。すなわち、私どもの称える念仏が「そのまま救う」という如来さまの願いであり、同時にそのよび声であるという

ことでもある。その如来さまの願い、すなわちご本願におまかせすることこそが、私どもの人生の究極の依りどころとなるのではなからうか。親鸞聖人はそれをもって他力の信心の内容とされたのである。

まことに私どもの人生には予断が許されない。今や世界中に蔓延してしまったこの新型コロナウイルスの災厄を、いったい誰が予測し得たであろうか。目にすることもできないほど微小なウイルスが、まさに世界中を混乱の極みに陥れたと言えるが、そのただ中であつて、私たちの人生にいかに対処していくべきかは、私ども自身の問題である。

私どもは幸いにして弥陀の本願の教えに遇うことができ、それをもって、自らの人生の礎とすることができると縁に恵まれている。それによつて現代の人間の課題、世界人類の行く末についてまで思いをいたすこともまた、私ども念仏者の責務ではないかと思われるのである。



12月19日の
報恩講で
お配りする予定

報恩講とは

浄土真宗にとって、もっとも大切な仏事です。
親鸞聖人のご命日をご縁として、私たちを救ってくださる仏さま(阿彌陀如来)、そして親鸞聖人をはじめ先だっけられた方々のお導きによってこの私が念仏のみ教えに出遇い、生きる依りどころをいただいているご恩にお礼を申しあげる法要です。

2021(令和3)年 報恩講日程

※東京都のコロナウイルス感染症対策の状況により、報恩講の態勢に変更の可能性がございますので予めご了承ください。

法要	日 中			
	晨 朝	10:00~		
時間	6:30~	11/11~15 9:20~ 11/16 9:10~	御 示 談 / 布 教	
行事	勤行 布教 30分1席	御 示 談 / 布 教 30分1席	法要	布教 30分2席
11/11 (木)	往生礼讃日夜偈 御文章:聖人一流章 約50分	芝田正順師		
11/12 (金)	往生礼讃日夜偈 御文章:聖人一流章 約50分	相馬一意師 30分	無量寿經作法 約50分	芝田正順師
11/13 (土)	往生礼讃初夜偈 御文章:唯能常御章 約50分	相馬一意師 30分	宗祖讃仰作法 約50分	成田真二郎師
11/14 (日)	往生礼讃中夜偈 御文章:大坂建立章 約60分	相馬一意師 30分	観無量寿經作法 約50分	藏田秀樹師
11/15 (月)	往生礼讃後夜偈 御文章:御命日章 約50分	相馬一意師 30分	二門偈作法 約50分	東條香勝師
11/16 (火)	正信偈行讃 御調頭:五十六億 御文章:御正忌章 約60分	布教 9:10~ 山田義俊師 40分1席	報恩講作法 約60分	宗務局長挨拶 引き続き 帰敬式

今年、新型コロナウイルス感染症対策のため、報恩講は規模を縮小しての開催となります。
変更時は築地本願寺webサイトにてご案内いたします。

 御給伝 絵解き 布教……親鸞聖人のご生涯を絵で記された「御給伝」についてわかりやすく解説いたします。
 御示談……親鸞聖人の教えに関する疑問に、専門的に答える法座です。



「法要」及び「布教」は、オンライン
『YouTube 築地本願寺チャンネル』にて
配信いたします

https://www.youtube.com/channel/UC1XC0dRKT1QJ_JYf5DKaQ



オンライン配信にてご視聴いただけます

速 夜		初 夜	
13:10~	14:00~	引き続き	17:00~
布教 40分1席	法要 布教 30分1席	帰敬式	布教 40分1席
	大師影供作法 約50分	芝田正順師	正信偈 草譜 六首引 約30分
	宗務局長挨拶		遠山泰範師
	奉讃大師作法 第一種 約50分	成田真二郎師	正信偈 草譜 六首引 約30分
			西原大地師
	浄土法事讃作法 約60分	藏田秀樹師	正信偈 草譜 六首引 約30分
			柏倉学師
	五会念仏作法 約50分	東條香勝師	正信偈 草譜 六首引 約30分
			千田匡真師
阿部信幾師	広文類作法 約60分	帰敬式	18:00 正信偈草譜 六首引 引き続き 御伝抄拝読 約120分
	御 俗 姓 拝 読		20:30~23:30 通夜布教 40分3席 P.20参照

Check here for
Tsukiji Hongwanji official
English Youtube channel!



<https://www.youtube.com/channel/UCBV1rzHwzjnpCk-0lGdYnA>

築地本願寺webサイトは
こちら!



<https://tsukijihongwanji.jp/>



住職が出勤予定の法要

親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年 慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

親鸞と恵信尼―京都時代と関東時代について妻の立場から―

一 はじめに

親鸞と恵信尼について、京都時代と関東時代のお話をさせていただこうと思います。お話の筋といたしましては、奥さんの恵信尼はどういう人であったのか、それから親鸞とはどのような夫婦であったのかというのを軸にしたいと思っています。いわば恵信尼の側から親鸞を見るという筋です。

恵信尼につきまして、皆様方はどのようなイメージを抱いていらっしゃるでしょうか。それはだいたい決まっていますね。「親鸞を立派に助けた坊守」。そして親鸞・恵信尼以後、今日に至る長い間の真宗寺院の奥さんたち、すなわち坊守さんたちのお手本になる人である。恵信尼のようになれば非常にいいな、ということですね。「坊守として夫を助ける恵信尼」ということで、夫を心から信じていた妻という図式です。

しかし、「親鸞を立派に助けた坊守」、

それだけだっただろうか、というのが私の疑問です。私は、恵信尼が親鸞との夫婦関係で苦勞したことや悩んだこともあったのではないかと、思うのです。これは、私どもが自分たちの夫婦関係を考えたときに、すぐ思い至ることです。十年、二十年と、お互いにまったく不満を持たずにきた夫婦があるでしょうか、ということなんです。おそろく何らかの不満や注文はあるのではありませんか。恵信尼と親鸞がそういった関係であったかどうかは明確にはわかりません。しかし一応、一歩下がって考えてみたいということなのです。

二 京都時代の恵信尼

貴族の娘・恵信尼

さて、親鸞と恵信尼はどこで結婚したのでしょうか。皆様方もお考えになったことがあるでしょう。これには二つの説があります。

第一は越後説です。親鸞が三十代半ばで越後国に流されて、その豪族である三善為教の娘の恵信尼と結婚したという説です。恵信尼のお父さんの名前が三善為教（為則）であったということは確実なこととしてわかっています。

次に、いやそうではない、もう京都で結婚していたのだという第二の説があります。恵信尼は日記もつけていた教養のある

女性で、京都の貴族の娘であり、親鸞は京都に在る間に結婚したのだ、というのです。

実は昔から、親鸞は越後国でその豪族の娘の恵信尼と結婚したという説が強くありました。山田文昭氏の『真宗史稿』（昭和九年）、大谷嬉子氏の『親鸞聖人の妻恵信尼公の生涯』（昭和五十五年）、藤島達朗氏の『親鸞をささえた妻と娘―恵信と覚信―』（昭和五十九年）などの著書にもそれは表われています。

したがって、赤松俊秀氏がその著『親鸞』（昭和三十六年）のなかで、いや、結婚の場所は京都です、恵信尼は貴族の娘です、と主張されたのはむしろ珍しい例に属します。私もはじめは、親鸞は越後国に流されたときにその豪族の娘の恵信尼と結婚したのだと考えていました。

しかし現在、恵信尼は京都の貴族の娘で、皆様は驚かれるかもしれませんが、身分からいえば皆様よくご存じの『源氏物語』を著わした紫式部や、『枕草子』の清少納言という女の人と同じ身分であった、と私は考えています。身分だけの問題ではなく、教養はもちろん生活感覚なども同じようであったろうと推測しています。そして恵信尼は、親鸞の一生の師として知られる法然の教えも受けていたと考えられます。―では、そんなことがどうしてわかるのでしょうか。

法然の弟子・恵信尼

平成八年四月に東京の真宗大谷派の真宗会館で開催されました真宗教学学会東京大会で、岡本嘉之氏が「親鸞聖人と恵信尼公の出会いについて」と題して興味深い発表をされました。それは、恵信尼の手紙を分析することにより親鸞と恵信尼とは京都で出会っていたとわかる、とする内容です。岡本氏は東京教区の大谷派の僧職の方です。そのあとすぐ、偶然ながら今度は本願寺派の方が同様の研究成果を公表されました。

恵信尼の手紙は大正十年に十通が西本願寺で発見されまして、その後多くの人たちが関心を持って研究してきました。しかし、法然と恵信尼の出会いについては今までだれも気がつかなかったのですね。もちろん私も気がつきませんでした。その恵信尼の手紙のなかに、親鸞の若いころのことについて触れている内容があります。恵信尼は八十二歳、ちょうど親鸞が亡くなったばかりで、親鸞はこのような人であった、と末娘の覚信尼に伝える内容の手紙なんです。親鸞が若いころに比叡山で堂僧を務めていたということは、この手紙でわかるのです。

親鸞は、九歳のときから二十年間、比叡山延暦寺で修業しました。でもいろいろと悩みがつきず、二十九歳のときに山を下りて京都の六角堂に百日間籠りました。これ

からどうしたらいいのかお告げをいただきたいと、六角堂の本尊であります観音菩薩にお願ひしたのですね。このようなお籠りをするのはそのころの習慣だったのです。すると九十五日目の暁に観音菩薩が出現してお告げをくださったと、恵信尼は書いています。

その恵信尼の手紙によりますと、親鸞は、堂僧を務めていた。もちろんそんなことは恵信尼は見ているのではないです。それから親鸞が六角堂に籠った。それも恵信尼は見えていません。のちになって親鸞から聞いたことでしよう。それで、六角堂でお告げをもらってから、親鸞はよき師を探して法然にめぐりあうことができ、また百日間、雨が降ろうが晴れて暑かろうが、どんな大事なことがあっても、それをさておいて法然のもとに日参したと恵信尼の手紙には書いてあります。

そしてこの恵信尼の手紙は、親鸞が法然のもとに日参する話に至ると、がらっと調子が変わるのです。つまり六角堂のことまでは人から聞いた話として書いていただけなのに、親鸞が法然を訪ねたことは、なんと恵信尼が実際に見ていたとわかるように書いています。恵信尼の手紙では、

六角堂に百日こもらせ給て候けるやうに、又、百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にもまいりてありしに、とあります。少しむずかしい文法の話にな

りますが、「ける（けり）」と「し（き）」ということばの使い方を調べることによって、恵信尼は法然のもとに通った親鸞を見ていたことがわかるのです。

昔の文法では、他人から聞いた過去のことをいう場合と、自分が経験した過去のことをいう場合とではことば使いが違ったんです。硬いことばでいえば、使用する「過去を表わす助動詞」が違います。その助動詞は「き」と「けり」です。「き」は自分が実際に経験した過去のことを表わし、「き・し・しか」と変化します。「けり」は他人から伝え聞いた過去のことです。「けり・ける・けれ」と変化します。

恵信尼の手紙では、親鸞が九十五日目の暁に観音菩薩のお告げをいただいたことについては、「ける（けり）」を使ってあります。つまり、のちになってから親鸞から聞いたことなんでしょうね。ところが、ここから手紙の助動詞の使い方が変わって、法然のもとに親鸞が百日間通った話になると、助動詞「き（し）」を使って自分の体験として恵信尼は語っているのです。続いて恵信尼の手紙には法然がこういったとあります。

善き人にも悪しきにも、同じやうに、生死いづべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候しを、うけ給はりさだめて候しかば、
「善人であっても悪人であっても、皆、

念仏を称えれば必ず救われる、と親鸞がうかがったということを自分も聞いた」、と恵信尼は書いています。使用している「過去を表わす助動詞」はすべて「き（し、しか）」ですから、そのように判断せざるをえないのです。

私は、恵信尼はいつたいどこで親鸞と知りあったのかということとともに、念仏の信仰にどこで入ったのかという点について関心を持ってきました。それがなんと、親鸞と同じころに法然の弟子であったのです。そしてそれを恵信尼は覚信尼への手紙のなかで語っていることになるのです。しかも法然の弟子になったのは、親鸞より恵信尼の方が先と考えられるのです。

恵信尼の実家の三善家というのは、曾祖父と考えられます三善為康以来、比叡山の念仏の坊さんたちを大事にしていた家柄です。熱心な念仏信仰の家柄なのです。為康は念仏で往生した人たちの伝記を集めて『拾遺往生伝』と『後拾遺往生伝』を執筆しました。『拾遺往生伝』は比叡山黒谷の浄意という僧侶の協力を得て完成しています。また為康自身も『本朝新修往生伝』という本に念仏往生した人として載せられています。

それに当時の朝廷の摂政の九条兼実、親鸞が法然に弟子入りする十二年も前から法然と親しくしています。法然はすでに主著の『選択本願念仏集』を書き上げ、兼実

に差し上げています。恵信尼の父三善為教はその九条家の家司でした。家司というのは、身分の高い貴族の家のなかをとりしきる役で中流の貴族だったのです。

三善家が一家をあげて法然の教えを受けていたであろうこと、恵信尼が法然の教えに親しんでいたであろうことは、十分に考えられるのです。これが恵信尼が法然の指導を受けたのは親鸞より先だろうと思っておりますもう一つの根拠なのです。

『恵信尼消息』原文

こぞ 去年の十二月一日の御文、

おなじきはつか

同二十日あまりに、たしかにみ候ひ

ぬ。なによりも殿の御往生、なかな

かはじめて申すにおよばず候ふ。

もつ

山を出でて、六角堂に百日籠らせ

やま

ろっかくどう ひやくにちこも

たまひて後世をいのらせたまひける

ごせ

に、九十五日のあか月、聖徳太子の

きゅうじゅうごにち

つき

しょうとくたいし

文を結びて、示現にあづからせたま

もん

むす

じげん

ひて候ひあひまゐらせんとたづねま

そつら

みらせて、法然上人にあひまゐらせ

ほうねんしょうにん

て、また六角堂に百日籠らせたまひ

ろっかくどう

ひやくにちこも

て候ひけるやうに、また百か日、

そつら

ひやく

にち

降るにも照るにも、いかなる大事に

ふ

て

だいじ

もまゐりてありしに、ただ後世のこ

ごせ

とは、よき人にもあしきにも、おな

ひと

みち

じやうに生死出づべき道をば、ただ

しょうじい

おほ

そつら

一すぢに仰せられ候ひしを、うけた

ひと

おほ

そつら

まはりさだめて候ひしかば、

そつら

まはり

「上人のわたらせたまはんとおほ

しょうにん

おほ

そつら

は、人はいかにも申せ、たとひ悪道

ひと

もう

あくだう

にわたらせたまふべしと申すとも、

もう

もう

世々生々にも迷ひければこそありけ

せせしょうしょう

まよ

み

とまで思ひまゐらす身なれば」

おも

み

と、やうやうに人の申し候ひしとき

ひと

もう

そつら

も仰せ候ひしなり。

おほ

そつら

稱讃寺 行事予定

二〇二二年 十一月の行事予定

- 六日(土) のんのん法話会 午後二時
- 七日(日) 日曜礼拝 午前十時
- 一四日(日) 日曜礼拝 午前十時
- 一六日(火) のんのん法話会 午後二時
- 二二日(日) 日曜礼拝 午前二〇時
- 二六日(金) のんのん法話会 午後二時
- 二八日(日) 日曜礼拝 午前二〇時
- ※毎朝七時 おあさじ
- ※毎夕六時 おゆうじ

※今号から「現世利益和讃」を掲載する予定でしたが、次号より掲載させていただきます。

ゆいん

唯信

ひと

あゆ

このことと歩み

二〇二二年「心のともしび」十一月カレンダーより

二〇二二年 十二月の行事予定

- 五日(日) 日曜礼拝 午前十時
- 六日(月) のんのん法話会 午後二時
- 一二日(日) 日曜礼拝 午前十時
- 一六日(木) のんのん法話会 午後二時
- 一九日(日) 日曜礼拝 午前十時
親鸞聖人報恩講 午後二時
- 二六日(日) 日曜礼拝 午前十時
のんのん法話会 午後二時

二〇二二年 一月の行事予定

- 六日(木) のんのん法話会 午後二時
- 九日(日) 日用礼拝 午前十時
- 一六日(日) 日曜礼拝 午前十時
のんのん法話会 午後二時
御正忌報恩講

- 二三日(日) 日曜礼拝 午前十時
- 二六日(水) のんのん法話会 午後二時
- 三〇日(日) 日曜礼拝 午前十時

編集後記

先月、一緒に住んでいた甥が、友だちの仕事の手伝いで、カナダのバンクーバーに行きました。住まいが落ち着いたころ、周りを探索したら、浄土真宗のお寺さんが、近所にあることを知り、早速、伺ったそうです。ご住職の生田さんに会うことができ、僧籍を持っていることを話したら、法務を手伝わないかと言われたそうです。

このお寺は五年前、世界仏教婦人会大会で、木原さん、堀さんご夫妻、住職の母・姉と私(住職)が参拝しましたスティブストン寺院でした。今年の九月に境内に老人ホームを開設されたそうです。二〇〇室ぐらいあるそうです。

左の写真は、コロナ禍において、お寺での法話会の様子です。

お寺の対策として、その場に集まらなくても、



リモートでご参加のご門徒さんたち

リモートでご門徒さんが参拝・ご聴聞できるように工夫なさっておられるようです。ここまで出来ないにしても、開教の姿勢を見習いたいものだと思います。